

## 組織的な大学院教育改革推進プログラム 平成20年度採択プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称 : 歴史資源アーカイブ国際高度学芸員養成計画  
 機 関 名 : 東北大学  
 主たる研究科・専攻等 : 文学研究科 歴史科学専攻  
 取 組 代 表 者 名 : 阿子島 香  
 キ ー ワ ー ド : 高度な学芸員能力の養成、本格的な現場実習、海外実地研修、  
 原資料・史料のアーカイブ整備、歴史学専門教育の高度化

### I. 研究科・専攻の概要・目的

東北大学大学院文学研究科は、文化科学、言語科学、歴史科学、人間科学の4専攻からなる。それらは28の専攻分野を研究・教育の基礎的単位として構成されている。平成22年度（5月）の専任教員数は、教授40名、准教授36名、助教・助手18名である。本プログラムの主体である歴史科学専攻は、日本史、考古学、東洋史、ヨーロッパ史、東洋・日本美術史、美学・西洋美術史の6つの基礎研究室から構成されている。その専任教員数は、教授10名、准教授7名、助教・助手6名である。兼務教員と協力講座、連携・併任分野については、総合学術博物館から協力教員教授1名、東北アジア研究センターから協力講座の比較文化史学教授1名、准教授1名、そして連携大学院方式による文化財科学専攻分野に客員教授2名、客員准教授1名が併任されている。文化財科学専攻分野は、宮城県教育委員会との協定書によるものであり、宮城県多賀城跡調査研究所および東北歴史博物館との連携大学院を構成している。歴史科学専攻の平成22年度の学生数は、博士前期課程36名、博士後期課程47名である。

人材養成目的として、文学研究科の教育理念は、人文社会科学を構成する各専門分野の研究を通じて、人類文化の知的遺産を確実に継承し、その創造的発展に積極的に寄与しうる研究者および高度な専門的職業人を育成するとともに、幅広い教養と専門知識を柔軟に活用できる人材を広く社会に送り出すことである。そのような人材は、各専門分野における先端的な研究能力を修得するのみならず、幅広い学際的視野と卓越した国際的発信能力を備えていなければならない。現代社会が抱える諸問題の解決には、何よりも分野を横断した学際的協働と国境を超えた国際的協力が要求されているからである。そのためには、海外からの留学生を積極的に受け入れ、日本文化の理解を通じて国際理解を深めると同時に、現場の課題に取り組む社会人の再教育に力を注ぐことによって最新の研究成果の社会への還元をはかることが必要となる。文学研究科が目指すのは、人間の精神活動や社会活動への深い洞察力に基づいて異質の文化を理解し、高度で幅広い知識を生かすことによって人類社会への貢献をなしうる人材の養成である。

そして、文学研究科の研究目標のうち、歴史科学専攻においては、「(3) 人類の営みである歴史を、文献資料、考古的資料、芸術作品等の分析を通じて解明し、再構成し、評価することにより、未来を展望する指針を探り出す」、および「(5) 研究を通じて蓄積する知的資源を整備し、その活用を促進する」の2項目に教育の重点を置いている。教育理念、研究目標は文学研究科規程、内規等に基づき、「学生便覧」等で周知、公表されている。

文学研究科は、非常に多岐におよぶ豊富な歴史資源を保有している。これらは、1922年の「法文学部」創設以来の各分野の先学による研究・教育の結果である。たとえば日本史・考古学の分野では1925年に「奥羽史料調査部」が国史研究室内に設置され、以来長年にわたる史料・資料の収集・研究の蓄積が継承され、現在の大学院教育の基盤のひとつになっているわけである。本GP申請にあたって、歴史科学専攻が積み重ねてきた共同研究の実績がベースとなった。「歴史資源」として捉える歴史資料の多角的研究（平成14年度）、「東北大学歴史資源アーカイブの構築と社会的メディア化」（平成16年度）、「歴史資源としての史料分析の現在」（平成18年度）などが、総長裁量経費等を得て実施されてきた。東北大学が有する考古資料、美術資料、古文書などの多様な資料を「歴史資源」として

捉えて、各研究分野を横断する新たな資料論の確立を目指したものである。大学院教育における「歴史資源アーカイブ」の有する意義は、歴史科学専攻の各研究室で共有されており、本プログラムに発展したものである。また本専攻では従来から数多くの学芸員を、博物館・美術館・文書館に送り出してきた実績があり、本GPでは特に専門分野における高水準な研究を基盤にした高度な学芸員の養成ということを重視している。

## II. 教育プログラムの目的・特色

我が国の「成熟社会化」への進行のなかで、人文知の確かな継承と創造のための機構整備は社会的な要請であり、歴史学も改革を必要としている。変転めまぐるしい現代にあつて、過去の文化の叡智と、人々の生きざまに学ぶ総合的な歴史学への社会的要請は大きく、生涯学習ニーズの広範な拡大がみられる。博物館、美術館、文書館等において、収藏品研究、保管活用、企画展示などには、その質に対し非常に高い水準が求められるようになった。本プログラムでは、これらの要請にこたえる高度な資質の学芸員を、国際性豊かなカリキュラムのなかで体系的に育成することをねらいとした。専門分野に深い学識を有し、かつ幅広い対象資料に通じていて、世界各国の学芸員と対等な活動ができる世界水準の優秀な人材の着実な養成は、喫緊の社会的急務である。それは本研究科の人材養成目的にも合致している。

従来、学芸員教育は、細分化した専門分野において行われてきた。優れた学芸員はこれまでも多く育ってきたが、いわば個々の教員や研究室が有する個別の技量に依存してきたという点は否めない。学芸員の国家資格も、5科目12単位を要件とする学部卒業の資格であり、現今の社会的要請とはギャップが大きい。現実には大学院教育が必須であった。本計画は、いわば個人わざ頼みの現状を改革し、組織的な養成課程として体系化することをめざす。日本のリーダー的学芸員の養成に重点をおくことで、また歴史学全体における大学院教育の改革への牽引車としての役割を果たすことも目標とした。

本歴史科学専攻では、文字史料に加えて考古資料、美術資料など多様な形を取る原資料を「歴史資源」として捉え、個別分野横断的な研究方法、新たな資料学・史料学の構築、その社会的公開をめざして、平成14年度から共同の教育研究活動を重ねてきた。本教育プログラムでは、古文書、遺物・遺跡、絵画・彫刻など様々な形態の資料を、統合的に蓄積する「歴史資源アーカイブ」を媒介にして、大学院生たちを原資料に、現場で、実地に取り組みさせるプログラムを発展させる。すなわち、各分野で個別に行われてきた学芸員教育を、実物・原典資料を通じてリンクさせ、専門性と広域性を同時に醸成していくという特色を持つ。

平成20年度に、二つの学芸員養成コースを新たに設置した。考古学、東洋・日本美術史、美学・西洋美術史からの、モノ資料を主な対象とする教育分野を「キュレーター養成コース」、日本史、東洋史、ヨーロッパ史からの、文献史料、木簡、金石文などを対象とする教育分野を「アーキビスト養成コース」として、カリキュラムを体系化した。それぞれの分野での資料の特性を踏まえた高水準の実物教育を進めた。前者は美術館、文化財研究所、博物館、埋蔵文化財センターなどで、後者は博物館、史料館、公文書館、図書館などで国際レベルの活躍ができる人材を養成することが目的である。

また歴史資源アーカイブの維持管理を行うシステムを、各分野の歴史資源の特徴に即して確立し、その運営プロセスを通じての教育を行うことも、本プログラムの特色である。東北大学に収蔵されている豊富な資料、また調査資料、画像記録などは、アーカイブの一部としてデータベース化し、社会的共有を進める。高度な分析訓練のための設備、デジタルデータの蓄積と活用に必要な機器を充実させていく。東北大学総合学術博物館、東北大学史料館、平成8年から連携大学院文化財科学を実施している多賀城跡調査研究所および東北歴史博物館とは、さらに実質的協力を深めて、院生が現場に学び、また大学が地域と連携する機会を拡大する相乗効果を得る。

## III. 教育プログラムの実施計画の概要

博士前期課程においては、まず各自の専門分野の原資料に堅実に取り組み、歴史資源のもつ本質について良く理解させる。基幹科目として特論、展開科目として研究演習、研究実習等で、正統的な

# 歴史資源アーカイブ国際高度学芸員養成計画

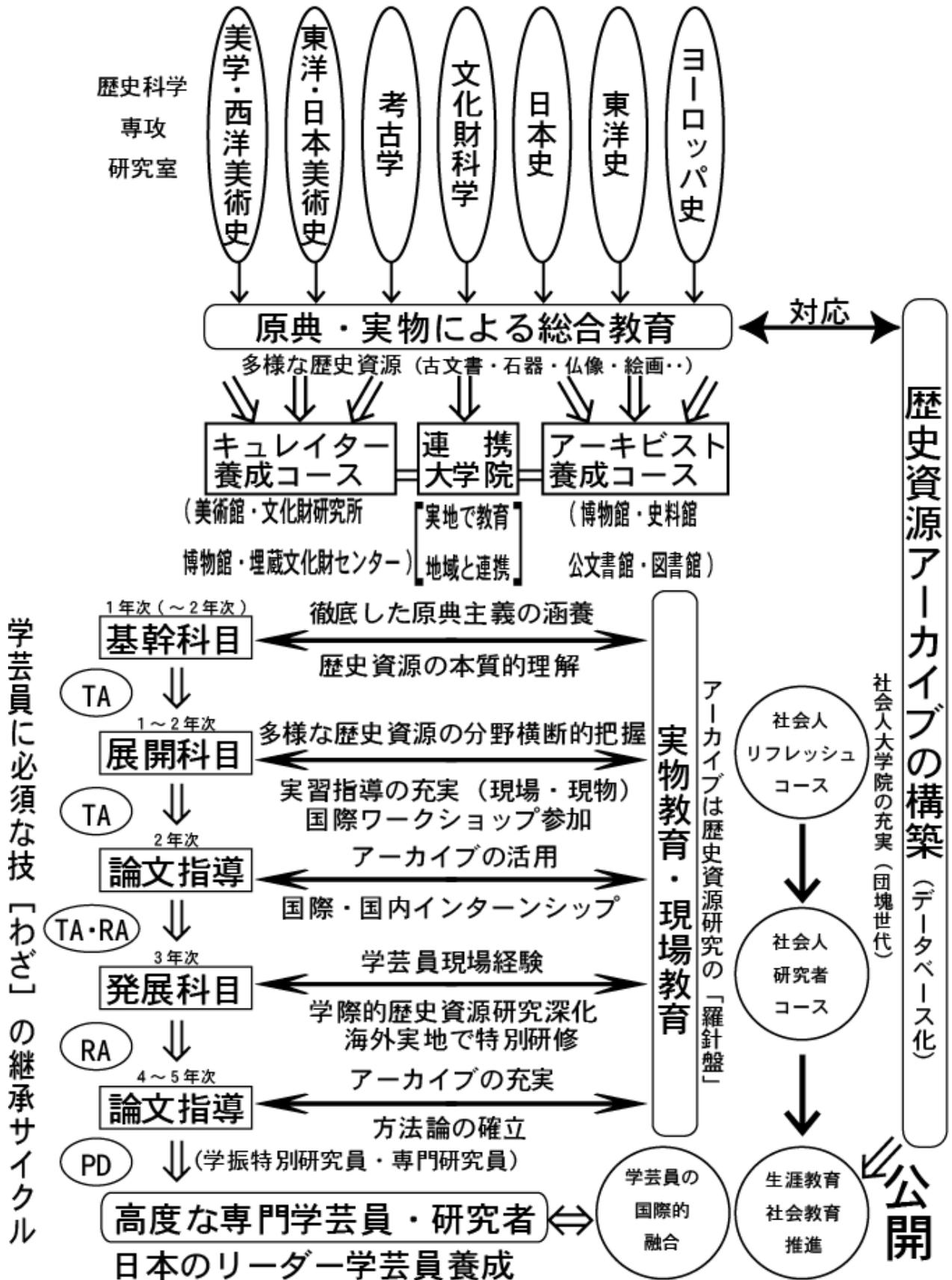


図 履修プロセスの概念図

原典主義を徹底して学ばせる。コースでは実物教育・実地教育の機会を海外を含めて豊富に提供し、各自の志望進路を加味した学際的な選択を用意し、修士論文へ展開させる。隣接分野の科目履修により、原資料の実態に存在する歴史資源の多様性の認識を深める。デジタルアーカイブは多様な歴史資源研究の鳥瞰図、いわば「羅針盤」の役割も果たすわけである。

学芸員としての国際的素養を醸成するため、博士前期・後期課程を通して、教員主導の海外実地教育を実施し、交流実績のある機関へ派遣し院生レベルの相互交流を行う。

博士後期課程では、学術雑誌への論文掲載指導を通して、原資料から論文に至るプロセスについて正確に把握させる。人数、期間等を明示して募集し、院生自身に実施計画を企画・立案させ、教員の指導の下で実施させることで、健全な競争的環境を作り、研究の計画と実施に関する様々なマネジメント能力を養う。院生の研究成果のフォーラムを実施し、隣接分野の実際をも学ぶ機会とする。また歴史資源を扱う調査・研究に共通する倫理的側面については、系統的に指導する。これらプロジェクトにおいても、海外所在の歴史資源研究、比較研究、他国の歴史学との交流を、実物・実地の原則をもって経験する機会をもたせる。

本プログラムにより院生を、ティーチングアシスタント（TA）、リサーチアシスタント（RA）として支援し、それぞれの立場での教育経験を積ませることで、歴史資源研究法の「技(わざ)の継承サイクル」をカリキュラム化して、それにより大学院教育を実質化する。

具体的な実施計画として、次のような計画を立てた。

#### ①大学院教育・論文指導へ歴史資源アーカイブを結合していく計画。

修士論文、博士論文の研究に各分野のアーカイブを利用できるよう、インフラの整備を、専門家の協力を得て進める。大学院生のアーカイブ利用を指導・支援する。分野ごとに異なった、多様な資料形態に最適なシステムを構築し、従来の個別保存データを管理統合する方法を整備する。

#### ②歴史資源分析の、訓練設備の整備と実習指導

大学院生の機器使用訓練（史学系の弱点補強）のため、汎用性の高い機器を設置する。キュレーター養成コースに、デジタルマイクロスコープ(仏像などの内部観察も可能)。アーキビスト養成コースに、マイクロフィルムスキャナー一式（各分野の文献史学に共通のフィルム、マイクロフィッシュによる教育研究に汎用）を整備し、実物・原典資料を観察・分析させ、機器使用の研究と資料取扱の方法を深く学ばせる。

#### ③資料分析の、文献的な教育基盤整備

教育課程の基盤的環境整備を行う。研究資料、文献を購入する。イギリス、イタリア、オランダ、オーストリア、アメリカ、中国、韓国、ロシアなど、本専攻教員の国際的事業の指導分野である地域について（それは、院生実地指導の対象地域でもあるが）、基盤的歴史資料を整備する。日本史、東洋・日本美術史、考古学では国内基盤的資料の重点購入も行う。海外の大型コレクションや、古書マーケットを検討し、支援期間終了後にも、当大学の教育基盤となる基準で選定する。

#### ④大学院生の本格的実地研修の募集と実施

海外および国内の資料研究プロジェクトに、人数、期間等を明示して募集する。研究経費を支援し、教員が指導する。院生海外研修に向けて、各国の大学・博物館等と教育打ち合わせ、現地調査を実施する。

#### ⑤埋蔵文化財調査・整理・分析の実習を行い、総合的な文化財の調査経験の機会を提供する。

⑥海外から高度学芸員養成に焦点をあてた招待講演を実施する。米国スミソニアン機構等の博物館・美術館から候補を検討する。院生・教員による関連シンポジウムを開催し、成果を刊行する。

⑦大学院生の国際研修の実施。本研究科と交流実績のある機関と、院生の相互交流を行い、博物館・美術館などでの資料研究を指導する。ロシア科学アカデミー・シベリア支部、香港中文大学、ローマ大学ラ・サピエンツアをはじめ、取組担当教員により現実的に実施可能な機関は各国に多数あるので、これらをベースに計画を立てた。

⑧最新の設備を活用して、論文指導へのアーカイブの結合を推進する。さらに研究資料が、今後に蓄

積されていくメカニズムを開発する。多様な資料の標準化に向けて、具体的なモデル論文を指導する。現在の個別的な歴史資源記録システムから、共通形式への可能性を研究し、教育に活用することを目標にした。

⑨学芸員養成コース共通の科目として、新たな授業科目を開設する。各分野に共通である、歴史資源研究における社会的問題について、倫理面を含めて、実際の資料・史料にもとづいて指導する。

⑩本プログラムで支援した大学院生の研究成果を報告、指導し、総合的歴史学の観点でシンポジウムを実施する。大学院生の研修をはじめ、プログラムによる成果を総合し出版する。

⑪アーカイブシステムの方法と内容を総括し、継続整備と公開を推進する。実物資料・文献史料の統合的資料論を研究、指導する。大学院生が参加し、システム担当者と歴史資料・史料担当者の支援を得て、教員との共同作業で、構築を進めたアーカイブの成果を共同研究会で検討し、今後の両コースの継続体制を具体化する。

⑫外部評価を実施し、その結果を公表する。

以上は、計画調書（修正変更版）で述べた支援期間中の当初の計画の概要である。

#### IV. 教育プログラムの実施結果

##### 1. 教育プログラムの実施による大学院教育の改善・充実について

###### (1) 教育プログラムの実施計画が着実に実施され、大学院教育の改善・充実に貢献したか

###### ①新コースの設置

平成20年10月の本G P採択と同時に、キュレーター養成コース・アーキビスト養成コースを設置した。いずれも学芸員資格を有する院生を主な対象にした、より高度で、かつ国際的な素養を備えた優れた学芸員としての能力を身につけるためのコースである。いずれのコースの所属学生も、博士前期課程・後期課程において、歴史科学専攻のうちで一つの専攻分野に所属しながら、より幅の広い授業科目を履修し、また両方のコースで提供される高度な学芸員の資質を養成するための各種プログラムにも参加できる。

###### キュレーター養成コース

このコースは、さまざまな形の歴史資料（歴史資源）の中で、考古資料・絵画・彫刻等の「モノ資料」を研究対象とする専攻分野を中心に学び、将来は、博物館や美術館、文化財センターなどで活躍する専門家を養成する。対象専攻分野は、考古学、文化財科学、東洋・日本美術史、美学・西洋美術史である。

###### アーキビスト養成コース

このコースは、文献史料を研究対象とする専攻分野を中心に学び、将来は、博物館や公文書館、史料館などで活躍する専門家を養成する。

歴史科学専攻の開講科目の中から、両コースの科目として適切な授業科目を認定し、それにより各院生の負担増を避けつつ学際的な科目履修を促し、そしてG P支援による各種プログラムと相乗的に連動することで、国際高度学芸員としての資質を涵養するシステムとした。21年度は、キュレーター養成コースに20科目、アーキビスト養成コースに32科目を指定した。コース登録者は、「院生プロジェクト」、各研究室で個別に実施する研修活動、T A活動、R A活動、国際セミナー、国際シンポジウム、その他本G Pが実施する諸事業に、積極的に参加し、また支援を受けた。二つのコースの登録者数は次のようであり、歴史科学専攻の院生の多数に及び、本G Pが重要な位置をしめることが分かる。学際的に授業科目を再編成して両コースのシラバスを別冊とし、隣接分野の授業科目を履修しやすい方式とした。

平成20年度 キュレーター養成コース21名、アーキビスト養成コース23名 計44名

平成21年度 キュレーター養成コース19名、アーキビスト養成コース26名 計45名

平成22年度 キュレーター養成コース21名、アーキビスト養成コース24名 計45名

博士前期課程修了者、博士後期課程修了者のうち、各コースの修了要件を満たした院生に「コース修了証」が授与された。平成21年度は7名（博士前期6名、博士後期1名）であった。

## ②「院生プロジェクト」

本GPでは、平成21年度より「院生プロジェクト」を立ち上げた。これは、大学院生それぞれが、企画、立案、実施を行なう教育活動で、本GPによる二つのコースに登録している院生を対象に学内公募し、支援を行なうものである。院生研修の内容は多岐にわたり、また各学問分野による歴史資源の特有の性格も大きく関わることから、公募のカテゴリーとして2種を設定した。「海外歴史資源教育研究事業」は、教員同行、あるいは海外所在の機関のもとで行うプログラム研修を指し、「歴史資源個別分析プロジェクト事業」は、国内・国外を問わず、特定の歴史資源について、院生が主体となって研究を行うものである。研修計画の立案、内容の具体化と応募、海外への打診を含めた準備、実施に伴う実務、研修成果の整理、授業での報告、論文へのまとめ、それらの各段階において指導教員の方向付けときめ細かな指導が行なわれ、それぞれの研修は実施された。5月に科研費の申請書を参考とした様式で学内公募し、幹事会審査と指導教員の調整を経て採択し、年度内に実施させた。平成22年度は「院生プロジェクト」については、優先して規模を拡大した。それは、21年度の実施状況が非常に良好で、教育的な効果が大きいことが確認されたことによる。当プロジェクトは、院生に直接的な支援を行うものであり、実務事務手続きには相当に繁雑かつ困難な面があったが、GP補助金取扱要領ならびにQ&Aに従い、慎重に詳細な実施方法を定めた。その結果すべての院生プロジェクトは、21年度、22年度共に非常に円滑に進捗させることができた。それぞれの院生プロジェクトの結果については、本GPで開設した授業科目「人文社会科学研究（国際高度学芸員研究演習Ⅰ）」で発表させ、相互討論の材料とし、高度な学際性を育成するサイクルを企図した。表1（21年度15件）、表2（22年度22件）に、院生プロジェクトの内容を示すが、内容は非常に多岐にわたり、歴史科学専攻の教育の幅広さを示している。

## ③「国際高度学芸員研究演習Ⅰ」

本GPで新設したこの科目は、両コース共通の中核をなす授業である。シラバスで明示するように「大学院GPの支援を受けて行なった、海外および国内研修の成果について、授業で報告し、相互の

表1 平成21年度大学院GP院生プロジェクト事業内容

専攻分野	研究プロジェクト名
考古学	北アメリカ更新世・完新世移行期における環境変動と人類の適応行動に関する研究
考古学	イタリアにおける考古学と博物館学の現地研修及びソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査（2名）
美学・西洋美術史	コレッジョ作《キリスト哀悼》と北イタリアのテラコッタ像－カッシーノ修道院連合との関連から－
美学・西洋美術史	一五、一六世紀における宗教と視覚的表現
美学・西洋美術史	アンニーバレ・カラッチの壁画装飾における独自性の研究
東洋・日本美術史	仙台市内に遺る宗教彫像の基礎的調査研究
東洋・日本美術史	静岡・願成就院諸像をめぐる考察－運慶研究の一節として－
東洋・日本美術史	京都浄瑠璃寺九体阿弥陀像に関する調査研究
東洋・日本美術史	俵屋宗達の制作環境－海外博物館所蔵作品との比較研究－
ヨーロッパ史	1960年代アメリカのポップカルチャーに関する活字史料研究
ヨーロッパ史	1534-35年下ライン地方とミュンスターの再洗礼派運動の関係についての一考察
日本史	明治初年留守政府期大蔵省の稟議過程の研究
日本史	近世後期織物流通と都市社会に関する研究
東洋史	中国近代史関係文書の研究

表2 平成 22 年度大学院GP院生プロジェクト事業内容

専攻分野名	研究プロジェクト名
考古学	パンスヴァン・エチオール及び諸博物館における研修
考古学	モンゴルにおける Tolbor 遺跡群の発掘調査を通じた考古学の実地研修と日本の旧石器時代資料との比較研究
美学・西洋美術史	マルパガ城フレスコ画連作をめぐる絵画様式とバルトロメオ・コッレオーニの政治的パトロネージ研究
美学・西洋美術史	アングルの祭壇画調査
美学・西洋美術史	コレッジョのカーメラ・ディ・サン・パオロ装飾と 16 世紀パルマの古代研究
美学・西洋美術史	ナポリ近郊西洋古代・近世美術史研修及びピサのカンポサントのフレスコ画《最後の審判と地獄》とドメニコ会説教テキストとの関連－中世期教訓イメージの一事例－
美学・西洋美術史	ナポリ近郊西洋古代・近世美術史研修及びベノッツォ・ゴッツォリのフレスコ画巡礼－画家の自己称揚と「正面観」表現に関する調査研究－
美学・西洋美術史	17 世紀ロレーヌ公国での「視覚」に対する思想－ジョルジュ・ド・ラ・トゥールの《ヴェイル弾き》を中心に－
美学・西洋美術史	ルーカス・クラナハ(父)の祭壇画と 15-16 世紀バンベルク周辺の宗教プログラム研究
東洋・日本美術史	京都浄瑠璃寺九体阿弥陀像に関する調査研究－薬師信仰から阿弥陀信仰への展開－
東洋・日本美術史	鎌倉時代の僧侶の肖像画に関する研究－明恵上人像を中心に－
東洋・日本美術史	莫高窟第 285 窟の造営とその宗教的機能
東洋・日本美術史	定家詠十二月和歌花鳥図・同角皿の基礎的研究
東洋・日本美術史	狩野永徳「洛外名所遊楽図屏風」に関する調査研究－「小督図屏風」を中心として－
ヨーロッパ史	近世フランスの中央集権化と社团的編成の包括的研究－マルセイユの事例を通して－
ヨーロッパ史	初期キリスト教殉教者行伝文書、殉教者暦文書の用語法に関する文献学的研究－使徒ヨハネの事例を中心に－
日本史	明治期の都市形成に関する研究－函館・札幌と仙台－
日本史	近世後期の高抜地をめぐる農民、村と領主権力－出羽国村山郡を事例として－
日本史	近代日本の百貨店と大衆消費社会形成に関する研究
日本史	7～8 世紀韓半島における宮都と庭園－益山・王宮里遺跡と慶州・月城雁鴨池遺跡を中心に－
日本史	明治初年太政官・大蔵省の政策決定過程の史料学的研究
東洋史	中国近代史関係文書の研究

討論を通じて「国際高度学芸員」の資質を涵養する。他専攻分野の研修内容について理解し、学芸員としての学際的な視野を深める。実際に研修を行う機会を得ていない履修者は、研修の計画書をレポートとして提出する内容である。パワーポイントによる演習形式をとり、演習発表者 1 名につき授業 1 回を割り当てて実施した。公募プロジェクトによる成果報告として、国内外の文書館・博物館・美

術館・遺跡などでの研修内容の報告を行なう。そして報告者の演習発表をもとに、分野横断的な議論を行ない、各専攻分野におけるアーキビスト・キュレーターの現状と課題について相互理解を図るものである(写真1)。院生プロジェクトによる経験を、二つの新設コースに登録した院生の間で共有することも、この授業の目的のひとつである。これにより、各自が属する専攻分野から、隣接の専攻分野に知識の範囲を広げ、学際性を養う。重要なメリットとして、各種の歴史資源の特色、現実の研究における困難な点、資料・史料の取り扱いの実際、先行研究の水準・到達点の理解など、「研究の現場」の状況について、他専攻分野の院生の努力を通して認識を新たにするという点があげられる。普段は自分が専門とする分野内にとどまらざるを得ない面があるかもしれないが、他の分野と比較することにより大きな教育効果をあげた。授業はG P幹事3名で担当した。



写真1 G P研究演習の様子

平成21年度(2学期)は27名が単位取得した。博士後期課程3年生が8名、2年生が6名、1年生が3名、博士前期課程2年生が4名、1年生が6名となっており、各年次それぞれの立場で発表と討論を行なった。専攻分野別にみると、キュレーター養成コースは、考古学4名、東洋・日本美術史6名、美学・西洋美術史7名、アーキビスト養成コースは、日本史7名、ヨーロッパ史2名、東洋史1名となっている。専攻分野の枠を超えた幅広い受講学生の構成であった。報告の後の討論においても、この点は非常に良い効果をもたらした。平成22年度は、15名が単位取得した。

#### ④ 「国際セミナー」「歴史資源ワークショップ」

海外の第一線の研究者から、直接に英語、原語で講義を受ける「国際セミナー」を実施している。大学院生は、研究の最先端をじかに聴くことで、大きな刺激を受けた。必ずしも全部理解できるとは限らないが、このような研究の世界が手の届く範囲にあり、何がどのように問題になっているかを知ること、展望を開く貴重な機会になった。英語講演の内容については、あらかじめレジュメや原稿、配布資料を整え理解を促した。また「歴史資源ワークショップ」は原資料に直接に取り組みながら研究法を学ぶセッションであり、専門分野の第一人者から教える機会である。これまでの開催実績は次のようである。

- 平成20年12月12日 国際セミナー「First people of the North American Rocky Mountains」(ワイオミング大学ジョージ・フリソン研究所：マルセル・コンフェルド氏)
- 平成21年3月8日 歴史資源ワークショップ「石器表面の微細観察の方法」(石器使用痕研究会との連携)
- 平成21年8月5日 国際セミナー「徽州文書中の草字与俗字」(中国社会科学院歴史研究所：阿風氏)
- 平成21年10月5日 国際セミナー「European Cast Galleries in History and Today」(ミュンヘン大学附属石膏博物館：インゲボルク・カーダー氏)
- 平成21年11月6・11日 国際セミナー「Paleolithic of the Russian Far East/Neolithic of the Russian Far East」(ロシア科学アカデミー考古学民族学研究所：アンドレイ・ターバレフ氏)
- 平成22年3月26日 国際セミナー「Middle Neolithic of the Maritime Region (Primorye) : Sites, Cultures, and Landscape」(ロシア国立極東大学考古学民族学博物館：アレクサンダー・ポポフ氏)
- 平成22年4月2日 国際セミナー(歴史資源ワークショップ)「Analytical Method of Stone Tools in France」(パリ第I大学：ボリス・バレンタン氏、フランス国立科学研究センター：フレデリク・ブルネ氏)
- 平成22年6月1日 国際セミナー「The Secret of Tutankhamun's Gold」(メトロポリタン美術館特

別研究員：ニコラス・リーヴス氏)

平成22年7月21日 国際セミナー「河南省許昌靈井遺跡の調査と研究」(中華人民共和国河南省文物考古研究所：李 占揚氏)

#### ⑤ 国際シンポジウム

アメリカ・ドイツ・日本で活躍するアーキビスト・キュレーターを招聘し、東北史学会・大学院GP合同国際シンポジウム「文書館・博物館のこれからとアーキビスト・キュレーター養成」を開催した(平成21年10月4日)。世界と日本のアーキビスト養成や、博物館展示の現場からの基調報告をもとに、諸外国と比べ我が国で遅れが目立つ文書館の充実、そのための体系的アーキビスト養成教育、キュレーター(学芸員)の多様な業務における専門分野深化の問題について議論を深めた。博物館・美術館等の学芸員資格要件(学部卒の資格)の見直し、文部科学省によって決定され、また公文書管理法が施行される情勢のなか、海外トップクラスの学芸員活動について知見を新たに、今後の方向を見定める機会となった。この国際シンポジウムは、本研究科歴史科学専攻が中心となっている歴史学の総合学会「東北史学会」と一体となって実施され、全国から110名超の参加者があり、現職学芸員の参加者も目立った。基調報告は、安藤正人氏(学習院大学人文科学研究科アーカイブズ学専攻)「記録を守り、記憶を伝える—アーキビスト養成、日本の課題」、インゲボルク・カーダー氏(ミュンヘン大学附属石膏博物館)「ドイツにおける博物館・美術館の役割—その変化と展望」、キンバレー・M・モーラー氏(スミソニアン機構自然史博物館)「2Dから3Dへ—スミソニアン自然史博物館での展示構成・制作過程」であった。院生は多数参加し、貴重な経験となった。シンポジウムの全内容は、日本語訳を編集して刊行している。

考古学研究室と大学院GPとの合同で「国際シンポジウム—フランス考古学の現在」を開催した(平成22年4月3日)。講師として、ボリス・バレンタン氏(パリ第I大学)、フレデリク・ブルネ氏(フランス国立科学研究センター)を迎えた。シンポジウムは「旧石器時代の終末を通しての技術的な進化：フランスからの視点」というテーマで、すべて英語で実施した。考古学研究室の教員3名、ジュリアン・メートル氏(日仏共同博士課程留学生)が報告した。ヨーロッパ、中央アジアの後期旧石器時代以降の環境温暖化と人類適応、石器製作技術構造について、院生には最先端の議論を学ぶ機会となった。

#### ⑥ 海外研修

「院生プロジェクト」を含めて、多くの大学院生海外派遣を行なった(写真2)(IV・3(1)にて後述)。キュレーター教育では、考古学教員の引率によりスミソニアン機構自然史博物館で国際高度学芸員の資質養成の研修を英語で実施した(平成21年3月)。展示デザイナー、収蔵施設員、展示場教育解説員らと直接インタビュー研修し、現場で世界水準の展示設計を学ばせた。またパリにおいて考古学博物館、国立研究所、発掘調査現場で、博物館学と専門研究の研修を実施した(平成22年3月、7月)。



写真2 海外における発掘調査参加

(左：イタリア、ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡、右：フランス、パンスヴァン遺跡)

ナポリと近郊において、ローマ時代遺跡発掘参加、ポンペイなど世界遺産研修、古代・ルネサンス美術史研修を、教員主導で実施した（21年9月、22年9月）。これらの成果は報告書に刊行した。

#### ⑦ 国内研修

大学院生に非常に多数の研修機会を提供した。それらの目的地は、下記のように国内全域におよび、また重要な機関が多い。教員の綿密な個別指導により、高水準の研修を実施した。

【平成20年秋期】法華寺・大和文華館・奈良国立博物館（奈良）、鞍馬寺・三千院・常照皇寺・廬山寺・相国寺・承天閣美術館・細見美術館・京都国立博物館・浄瑠璃寺（京都）、和歌山県立美術館（和歌山）、国立西洋美術館・東京都美術館・サントリー美術館・東京藝術大学大学美術館（東京）、東京国立博物館・たばこと塩の博物館（東京）、金沢文庫（神奈川）、大阪市立美術館（大阪）、清水寺・六波羅蜜寺・東寺・羅城門跡・平等院鳳凰堂・京都国立博物館・京都大学総合学術博物館（京都）、山口県立美術館（山口）、真室川周辺における石材調査（山形）、大阪市立美術館（大阪）、平等院鳳凰堂（京都）、徳川美術館（愛知）、常照皇寺（京都）、国文学研究資料館（東京）、防衛省防衛研究所図書館（東京）、同志社大学人文科学研究所・京都大学図書館（京都）、国立公文書館（東京）、秋田県公文書館（秋田）、岩手県庁内の文書保存庫（岩手）、国立歴史民俗博物館（千葉）、臼田文化センター・臼田町誌編纂室（長野）、宮内庁書陵部・大学図書館等（東京）、明治大学博物館（東京）、広島県公文書館・広島市文書館（広島）、石巻市文化センター（宮城）、国立公文書館・三井文庫所蔵史料（東京）、京都国立博物館（京都）、国立西洋美術館研究資料センター（東京）

【平成21年春期】第62回美術史学会全国大会（京都大学）、長野県善光寺ほか諸寺院・博物館（長野）、岩手県立美術館等（岩手）、芦東山記念館（岩手）

【平成21年秋期】賀県神照寺ほか諸寺院・博物館（滋賀・京都）、西洋史研究会大会（東京）、東北日本の旧石器文化を語る会（福島）、倉敷考古館・岡山理科大学（岡山）、ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡発掘調査成果学会（東京）、岩手県山田町教育委員会（岩手）、国文学研究資料館（東京）、芦東山記念館（岩手）、宮内庁書陵部・慶應義塾図書館・東京大学附属図書館・国立国会図書館（東京）、船橋市立図書館（千葉）

【平成22年春期】会津若松市笹山原No.16 遺跡（福島）、京都浄瑠璃寺九体阿弥陀像に関する調査研究（京都・奈良）、加美町砂坂遺跡第1次発掘調査（宮城）

【平成22年秋期】第61回美学会全国大会（大阪）、兵庫県一乗寺ほか諸寺院・博物館（兵庫・京都）、東洋史研究会大会（京都大学）、舟形町高倉山遺跡の発掘調査（山形）、第24回東北日本の旧石器文化を語る会（秋田）、第9回古代史研究学会（京都大学）、周南市立中央図書館・山口県文書館（山口）、高野山霊宝館（和歌山）

## 2. 教育プログラムの成果について

### (1) 教育プログラムの実施により期待された成果が得られたか

「実施計画の概要」は全体的に実現できたので、番号により実施結果の成果を述べる。①各専攻分野の歴史資源の性格に即したアーカイブ整備が進み、「歴史資源アーカイブ成果報告書」で相互理解が深化した。②顕微鏡・マイクロスキャナー・測量機器が設備充実し、③貴重写本、文献購入で教育基盤が大きく充実し、院生の活動が高度化した（22年度は論文44点、学会発表31回）。④「院生プロジェクト」を軌道に載せ、計37人を支援し、実地研究が飛躍的に進展した。⑤「国際フィールドスクール」を山形県丸森1遺跡で実施し（21年、22年、計22日間）、ロシアの機関との協力で、本格的現場実習を実現した（院生学会発表3回）。多賀城跡、福島県笹山原、山形県高倉山遺跡で実習した。⑥国際シンポジウム（2回）、国際セミナー（10回）の経験で、院生の国際活動水準の大幅上昇をみた。⑦ロシア、イタリア、中国、アメリカ、フランスの指導的機関との恒常的な協力が、院生レベルで可能となった。⑧各研究室の歴史資源データベースが充実し、一部公表に至った。⑨国際高度学芸員研究演習Ⅰを計47名が履修し、分野横断的な相互討論の効果は飛躍的であった。⑩⑪⑫事業成果報告書を、計5冊（総ページ数1829ページ）刊行し、成果公開した。収蔵文化財の社会公開を進めた。大学博物館の展示制作にも院生が主体的に関わり教育効果が高かった。平成19年度と

平成 22 年度を比較すると、課程博士修了者は 5 名から 7 名に増加し、そして研究職への新博士就職者は、ゼロから 4 名に増加した。本 GP の成果を示している。

### 3. 今後の教育プログラムの改善・充実のための方策と具体的な計画

#### (1) 実施状況・成果を踏まえた今後の課題が把握され、改善・充実のための方策や支援期間終了後の具体的な計画が示されているか

大学院生の海外研修については「院生プロジェクト」の成功、また教員主導プログラムにより、非常に活発な活動が実現したが、今後は特に財源において困難が予想される。支援期間中に合計 29 名を海外に派遣した（平成 20 年度 6 名、21 年度 10 名、22 年度 13 名）。

海外研修目的地（実施順）

【平成 20 年度秋期】上海図書館（中国）、スミソニアン機構[自然史博物館、アメリカ歴史博物館、アメリカインディアン博物館]（アメリカ）、中国国家図書館（中国）、ブレラ美術館、スフォルツァ城博物館、ポルディ・ペッツォーリ美術館、市立自然史博物館、サンタナスターシア聖堂、ドゥオーモ、サン・フェルモ・マッジョーレ聖堂、カステルヴェッキオ美術館、アンブロジーアーナ絵画館（イタリア）、シュテーデル美術館、ドイツ建築博物館、ドイツ情報通信博物館、ドイツ映画博物館、モダンアート美術館、大聖堂、シルン美術館、ゲーテハウス、リービクハウス（ドイツ）、ヴェネツィア周辺の古文書館、美術館、教会（イタリア）

【平成 21 年度春期】サン・フランチェスコ教会、ドメニカーニ修道院、フィレンツェ美術史研究所（イタリア）、ワイオミング州の遺跡発掘（アメリカ）、ミュンスター大学図書館、比較都市研究所、デュイスブルグ私立文書館、デュッセルドルフ州立文書館、ボン大学（ドイツ）、ナポリ国立考古学博物館、ポンペイ遺跡、エルコラーノ遺跡、国立カポディモンテ美術館、オポロンティ遺跡、ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査（イタリア）、スタン・ゲッツ・ライブラリー、ニューヨーク公共図書館（アメリカ）

【平成 21 年度秋期】パラッツォ・ファーヴァ、イタリア国立絵画館、サンティ・グレゴリオ・エ・シーロ教会、ボルゲーゼ美術館（イタリア）、ドレスデン国立絵画館（ドイツ）、サンタ・ジュステーナ修道院、サン・ピエトロ修道院、サンタゴスティーノ聖堂、パルマ大聖堂、パルマ国立美術館、サン・ベネディクト・イン・ポリローネ修道院博物館、マックス・プランク美術史研究所、ボローニャ大学古文書学・中世史学科図書館、市立アルキジナージオ図書館、厦門大学教育研究院（中国）、マルチャーノ図書館、クエリーニ・スタンパリア財団図書館、総大司教古文書館、画像資料館（イタリア）

【平成 22 年度春期】エチオール遺跡、ヌムール先史博物館、パンスヴァン遺跡、古生物博物館、自然史博物館（フランス）、マルパーガ城（イタリア）、オーストラリア・カトリック大学（オーストラリア）、タルバル遺跡発掘（モンゴル）、敦煌莫高窟 285 窟（中国）、王宮里遺跡、月城雁鴨池遺跡（韓国）、国立カポディモンテ美術館、ポンペイ遺跡、パエストゥム遺跡、エルコラーノ遺跡、ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査、ナポリ国立考古博物館、ナポリ大聖堂、フランス国立図書館、県立ジョルジュ・ド・ラ・トゥール美術館、ナンシー市立美術館、ロレーヌ歴史博物館、ルーヴル美術館、ジャックマール＝アンドレ美術館（フランス）、リヴォルノ文化財監督保護局フォト・センター、ピサ大聖堂管財部フォト・センター、ピサ高等師範学校図書館、フィレンツェ美術史研究所図書館、ピサ大聖堂附属美術館（イタリア）

【平成 22 年度秋期】元サン・パオロ女子修道院、ステュアルド美術館、パラティーナ図書館、国立美術館、美術史研究所、アルキジナージオ図書館、サラ・ボルサ図書館（イタリア）、サン・ラザール大聖堂、トゥールーズ・ノートル・ダム大聖堂、アングル美術館、サン・セルナン聖堂、ビジー城、サン・ジェルマン・デ・プレ教会、パンテオン、クリュニー美術館、サント・シャペル、ノートル・ダム大聖堂、オルセー美術館、ルーヴル美術館、ノートル・ダム・ド・ロレット教会、ギュスターヴ・モロー美術館、サン・ヴァンサン・ド・ポール教会、サクレ・クール聖堂、サン・メリ教会（フランス）、サンタ・トリニタ・デイ・モンティ教会、ヴァチカン博物館、サンタ・マリア・マッジョーレ教

会（イタリア）、ヘルダー教会、ドレスデン国立絵画館、カトリック旧宮廷教会、フラウエン教会、ルターの家（博物館）、城館付属教会、聖マリア市教会、オプアファーレ教会、新宮殿美術館、ゲルマン民族博物館、聖セバルトゥス教会、聖ローレンツ教会、聖レオンハルト教会、ニコライ教会（ドイツ）

これらの目的地は、各院生の研究テーマおよび教員主導の研修計画と連動しており、支援期間中の成果により、その多くとは恒常的な提携関係が構築されている。世界各国の指導的な機関、重要な歴史資源の所在地である。今後、別途外部資金獲得、学内講座教育費により、可能な範囲での実施計画であるが、規模的には相当な縮小となろう。国内研修、現場実習（埋蔵文化財発掘調査実習）についても同様な課題がある。本格的な現場実習候補遺跡は数年先分まで確保されているが（山形県高倉山、福島県笹山原ほか）、外部資金の状況は即断できない。なお必要な装備（最先端の高精度自動測量機材等）、出土品分析設備（高倍率デジタル顕微鏡等）は充実したので、これらを十二分に活用できる。

#### 4. 社会への情報提供

(1) 教育プログラムの内容、経過、成果等が大学のホームページ・刊行物・カンファレンスなどを通じて多様な方法により積極的に公表されたか

- ①文学研究科ウェブサイト内に、本G Pのホームページを開設し、事業概要、カリキュラム、実施状況速報、公開の行事（セミナー）等について逐次更新を行なっている。
- ②詳細な事業成果報告書は、全部で5冊を刊行した。大震災により仙台の印刷所が被災するなどして遅れたが、全国の博物館・美術館・関係研究機関に送付する。
- ③文部科学省主催の「大学教育改革プログラム合同フォーラム」に3年連続参加した。20年度、21年度はポスター出展を行なった。22年度は資料参加を行なった。各年度とも本G Pの幹事教員が全日程出席し、分科会出席やポスター会場で、プログラム相互の情報交換に努め、運営の参考にした。
- ④大学博物館の全国博物科学会で本G Pの特別講演を行なった（22年6月）。東北大学広報誌「まなびの杜」に寄稿するなど、積極的に広報活動を進めた。本G Pのパンフレットを製作した。

#### 5. 大学院教育へ果たした役割及び波及効果と大学による自主的・恒常的な展開

(1) 当該大学や今後の我が国の大学院教育へ果たした役割及び期待された波及効果が得られたか

①学芸員養成の高度化および国際化について、本G Pの事業が学内的また対外的に認知され、今後の展開に関して波及効果を見た。国際シンポジウムでキュレーター・アーキビスト教育を課題とし、多くの現職学芸員の参加があった。多数の院生の積極的研修活動は、国内外の目的地で交流を広げた。

②東北大学収蔵の歴史資源（特に考古学資料）について積極的なアーカイブ化と社会的公開を推進した。支援期間中に、各地自治体の博物館等へ文化財資料貸し出し・調査対応・出版物掲載などで、計190件を実施した（平成20年度67件、21年度56件、22年度67件）。国民共有の文化財について、大学からの波及効果が得られた。

(2) 当該教育プログラムの支援期間終了後の、大学による自主的・恒常的な展開のための措置が示されているか

本G P事業内容の多くは、東北大学として継続していくが、財源的な問題による規模の縮小に関わらず、そのエッセンスを展開させていく。TA、RAはG P期間中に計94名が活動した（20年度後期TA11名・RA8名、21年度前期TA12名・RA7名、後期TA11名・RA7名、22年度前期TA12名・RA7名、後期TA12名・RA7名）。この規模の採用は、G Pあってこそだが、制度自体は東北大学でも確立されている。歴史資源アーカイブと社会公開は、東北大学の組織「学術資源研究公開センター」（総合学術博物館、史料館、植物園）を軸に展開していく。博物館実習についても同様である。キュレーター・アーキビスト養成コースは、当面継続し、文科省による24年度の学芸員資格改正があるので、継続的に見直す。本格的な現場実習は、文学研究科と宮城県教委との連携大学院により恒常的に機会を確保する。院生海外研修については、東北大学は世界各国81校の指導的・機関と学術交流協定を結んでいるので、積極的に活用しながら実施していきたい。

## 組織的な大学院教育改革推進プログラム委員会における評価

【総合評価】
<input type="checkbox"/> A 目的は十分に達成された <input checked="" type="checkbox"/> B 目的はほぼ達成された <input type="checkbox"/> C 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> D 目的はあまり達成されていない
<p>〔実施（達成）状況に関するコメント〕</p> <p>「国際高度学芸員を養成する」という教育プログラムに沿って、国内外の研修、国際シンポジウム、新コースの設置などの計画が着実に実施され、世界水準の人材養成が図られるなど、大学院教育の質の向上に大きく貢献している。</p> <p>特に、大学院生が主体となって企画する展示会の実施や、大学院生による論文・学会発表も積極的に行われ大きな成果が上がっている。</p> <p>情報提供についてはホームページ、ポスター、報告書などを通じて積極的な情報提供がなされている。学内においては新コースの恒久的設置、学外においては海外諸機関との交流、あるいは現場学芸員との連携など、大きな波及効果が期待できる。</p> <p>支援期間終了後の実施計画は縮小化の方向だが、外部資金の獲得、大学による積極的な支援により、一層の展開が望まれる。大学による自主的な展開については、今後、具体的な措置が示される必要がある。</p> <p>経費の使用については、めりはりのある使用となっており、経費節減の努力もなされている。</p>
<p>（優れた点）</p> <p>学生の自主的な計画による多様な事業が実施され実際的なスキルの向上が図られている。国内他大学、博物館などとの交流による地域との連携が目指されるとともに、海外諸機関との連携により、「国際高度学芸員」の養成が促進され、優れた教育モデルとして高く評価できる。</p> <p>（改善を要する点）</p> <p>支援期間終了後の大学独自の取組について具体的な措置が示されておらず、本取組の成果をいかに発展させうるかの検討が望まれる。</p>